

JICA 沖縄×浦添市国際交流協会 共催
ふれあい講座
シンポジウム『人々の「強制移動」と「難民」から平和を考える@浦添』報告

- 日時:2021年6月19日(土)14:00~16:15
- 場所:オンライン(ウェビナー)
- ゲスト:折居徳正氏((特活)難民支援協会)、藤浪海氏(関東学院大学)、ザカリリア氏(沖縄在住シリア出身者)
- 参加者人数:50名
- 協力:(特活)難民支援協会(沖縄平和賞受賞団体)、浦添市 Youth Peace Messenger
- 後援:沖縄県、沖縄平和賞委員会

「世界難民の日(6/20)」と「慰霊の日(6/23)」を前に、「人々の強制移動と難民から平和を考える@浦添」をテーマに2021年度第1回目のふれあい講座を開催しました。昨年度はコロナウイルスの影響で年間を通してふれあい講座を開催する事出来なかったふれあい講座ですが、今回はこれまでと異なり、オンラインでの開催となり、また内容もシンポジウム形式で行いました。

シリア出身のザカリリアさんに、午前に行った浦添城跡にある沖縄戦跡フィールドワークの感想を話していただきました。「浦添城跡が、今は自然豊かな公園なので、ここで激しい戦争があったことが信じられなかったが、ガイドの案内で知ることができてとてもよかった。シリアも破壊されてしまったが、浦添城跡の公園のように立て直していけたらいいし、ガイドのお一人の又吉さん(戦争体験者)の話は、ひどい経験だったが、今では笑顔で話しているのを見て、シリアの人たちも生きて戦争の経験を話していけたら」と話してくださいました。

その後、(特活)難民支援協会の折居さんからは世界の難民の状況や日本での難民受入れについてのお話、関東学院大学の藤浪さんからは、潜在的難民の概念を手掛かりに、「伊佐浜から問う難民と〈わたし〉」というテーマでお話をさせていただきました。

浦添市のピースメッセンジャーのお2人(泉志穂さん、加藤綾華さん、共に高校2年生)にも感想をいただきましたが、授業などこれまでに難民のことを聞いたことはあったが、新しいこと、細かい点についても聞いて良かったと感想を述べていました。加藤さんは、「潜在的難民という言葉が初めて聞いた。自分は十分な食べ物もあり教育を受ける機会もあって、自分は難民にはならないと思っているところがあった。難民問題を考えるときに、どう救えるのか、手を差し伸べられるかと考えていたが、共に社会を構成するためにどうしたらよいかというのをこれからは考えていきたい」と話してくれました。

難民に対するネガティブなイメージが大きいかもしれませんが、私たちの仲間の一員として、誰もが主体性を持ち、尊厳を保ちながら暮らしていける社会を築いていく、そのようなことを沖縄からともに考える場を作ることができたかと思えます。

長時間のオンラインでの開催にも関わらず、ご協力くださった皆様、ご参加の皆様、また情報保障(ノートテイク)に入ってくくださったボランティアの皆さんありがとうございました。

次回は8月28日(土)ミャンマーの人々との交流を予定しています。詳細は後日お知らせします。お楽しみに!

〈参加者の感想〉

・私達自身も潜在難民であること。無意識に私達は難民を支える側だと思い込んでいたことが覆され、改めて難民への考え方が変わりました。(男性、学生)

・事前のフィールドワークからのつながりが良かったです。また、かつて戦争で焼け野原になったこの場所の復活の様子がザカリリアさんにとっては希望でもあると分かり、現在も戦争や紛争の影響を受けている人がいることをリアルに感じ面食らったような気持ちになりました。(女性、一般)

〈オンラインシンポジウムの様子〉



浦添市の育成するピースメッセンジャーの2人(泉さん、加藤さん)

